

腹膜透析患者における下部消化管内視鏡検査の際の
予防的抗菌薬使用と腹膜炎発症に関する検討
第一期報告書

PD関連感染症プロジェクトチーム

腹膜透析患者における下部消化管内視鏡検査の際の 予防的抗菌薬使用と腹膜炎発症に関する検討

【背景・目的】

- ・PD患者における下部消化管内視鏡 (colonoscopy: CS) での腹膜炎発症率は3.4～8.5%とされている。
- ・CS検査の際は透析液を排液したうえで、予防的な抗菌薬を使用することをISPDのガイドラインでは推奨している。
- ・一方で、予防的な抗菌薬使用における薬剤選択や投与方法に関する統一した見解は存在しない。

- ・本邦でのCSの際の抗菌薬予防投与の実態を把握し、抗菌薬での予防効果を多施設で抗菌薬のレジメごとに検討を行う。また、抗菌薬の投与経路ごとに予防効果の比較を行う。

【方法】

- ・研究対象者 2018年1月から2024年12月に全国の14施設において観察期間中にCSを行った18歳以上のPD患者。
 - ・CSの時点ですでに腹膜炎を発症していた患者や別の理由で抗菌薬を使用していた患者は除外した。
 - ・評価項目 CS時の患者背景・検査所見に加え、CS関連情報として予防的抗菌薬使用の有無とその内容(抗菌薬の選択・投与方法)、内視鏡関連腹膜炎の発症の有無とその起炎菌・腹膜炎までの期間・転帰。CSにおける侵襲的処置の有無など。
- * 内視鏡関連腹膜炎はCS後7日以内の腹膜炎発症を定義した。

【結果】611回のCS、389名の患者

- ・年齢 66.8歳±11、男性 466名(76.3%)、PD歴 890日(355-1483)
- ・CS時の排液 604回(98.9%)
- ・抗菌薬予防投与 有 346回(56.6%)・無し 265回
- ・投与経路 IV 167回(48.3%)・経口 177回(51.2%)
- ・**腹膜炎 5回(0.82%)**
 - 抗菌薬有 2回(0.58%、IV 2回 1.20%、内服 0回 0%)・無 3回(1.13%)**

表 CS後腹膜炎患者

年齢・性別	原疾患	予防投与	投与方法	抗菌薬	液貯留	CS侵襲処置	発症日	起炎菌	転帰
61 M	腎硬化症	無			無	有	2	大腸菌	軽快
43 F	その他	無			無	有	3	大腸菌	軽快
75 M	その他	無			無	無	2	陰性	軽快
78 F	DM	有	IV	CMZ	無	有	3	陰性	軽快
94 M	腎硬化症	有	IV	CTR	無	無	4	MRSA	軽快

【考察】

- ① 611回のCSは今までの同様に既報と比べて、過去最大のサンプル数を集約することができた。
- ② CS時の透析液の排液はほぼ全例で行われていたが、予防的抗菌薬の使用は56.6%に留まった。
- ③ 本邦のCS後の腹膜炎は発症頻度が全体で0.82%と低く、予防的抗菌薬なし1.13%、予防的抗菌薬あり0.58%であった。
- ④ 予防的抗菌薬の投与経路として経口投与では腹膜炎の発症は認めなかった。

現在投稿準備中です。